

14 『万安方』にみられる麻疹の記載

広田 擘子

麻疹は古くは赤斑瘡（アカモガサ）、稲目瘡、麻子疹、麻疹（ハシカ）、赤疱瘡、疹、などともいわれてきた。鎌倉時代になると世人は麻疹をハシカと呼び、以後、医書にも室町時代後期からは麻疹という項目で記載されるようになる。

『万安方』には巻第四十二の小児四の十四瘡疹の項に述べられている。

中国で麻疹の病症が明らかに記載されたのは宋の初期である。日本では確かに麻疹の流行といえるのは長徳四年（九九八年）の流行である。数十年毎に大流行があつて、男女、老若、上下の別なく多数の死者が出たようである。

『医心方』小児門には麻疹についての記載はない。『万安方』（一三二五年）には、麻疹の原因について『聖恵』よ

り引用し、「熱い乳を飲んだために臟腑が熱して細疹（ハシカ）を生じたり豆瘡（モサカ）を生ずる。したがつて乳母を治療すべきである」としている。

また、錢一論³ず、として面赤く、目ふくれ……とあり、天行の病だとしている。疹が黒い時は十に一つも救い難しとある。

治療については、『董汲斑疹論』より、「斑疹が出ないうちに傷寒と考えて麻黄などの薬を与えると発汗して表虚裏実となる」とある。また、「もし陰癩とみなして温驚薬を用いると熱はいよいよ盛んになる」などと、間違つた治療をするとかえつて症状が重くなることが記されている。

『養生必要方』より、「このように傷寒と瘡疹と区別がつかないあいだは解肌湯に与える」と引用している。解肌湯とは升麻葛根湯のことで、江戸時代に至るまで麻疹にひろく用いられた方剤である。

治療方剤については、まず升麻葛根湯（升麻、白芍、乾葛、甘草）を一番最初に記載し、次に消毒犀角飲（防風、荆芥、甘草、鼠枯子）を挙げている。注にはこの消毒犀角

飲について、止咳、化痰し、春冬のあいだに常服すれば瘡疹を免れる、という文を『簡易方』から引用している。

これら二処方はいずれも麻黄剤でなく、安全に服用出来る方剤であり、瘡疹がひどくならないように初期に服用すべき方剤としては当を得ている。

次に安斑散、快斑散、紫草如聖湯、化毒湯などが挙げられている。これらは升麻、紫草などを主薬とする方剤で、疹が出た時にそれに対処するための方剤として記されている。

熱が続いた時には白虎湯（知母・人參・甘草・石膏）や黄耆散（黄耆・柴胡・乾葛・甘草）など、また、瘀血が有って諸出血が有る者には犀角地黄湯（犀角・生乾地黄・芍薬・牡丹皮）が良いとしている。

このように、升麻葛根湯を治療薬の第一に挙げ、麻黄剤を用いない、といったやり方は江戸時代中期にまでみられるものである。江戸時代の後期になると升麻葛根湯を治療方剤として挙げていない医書があつたり、麻黄剤を多く挙げている医書があつたりといった具合に治療法も多様になる。

『万安方』の瘡疹の項は、その後数百年における日本の麻疹治療の基本となるものであつたといえよう。

（擘小児科内科）